

跡見花蹊女史生誕百五十年 本学設立四十年 を迎えて

学長 田 尻 嘉 信

本年は跡見学園創立者跡見花蹊女史生誕百五十年・本学設立四十年にあたる。それを記念して、さきごろ教育界関係・教職員・校友を中心に多数が参集、祝賀会が催された。併せて女史遺作の書画と、本学図書館収蔵の百人一首関係文献計百八十余点の学外展示を行った。ともに盛況裡に団円となり、私学の将来のただならぬ折から、学園草創の往時を顧て思いを新たにしたのである。

「花蹊女史（名滝野）は、天保十一年（一八四〇）摂津国西成郡木津村（大阪市西成区）に生れた。年少一二歳で円山派石垣東山・楨野楚山に絵画、鈴屋派殿村茂済に和歌を、一七歳京遊学に山陽門宮原節庵に漢籍・詩文・書を学ぶ。円山派円山応立、中島来章、南画日根対山に教えを受けたのも、この遊歴二年である。和歌は、のち景園派高橋熊彦に入門、同派在京の大田垣蓮月・高島式部との好誼を得ている。天賦の才と熱心な修練によって、いちはやく諸芸、とくに書画堪能の聞えをとった。文久二年（一八六一）和宮隆嫁の際をはじめ、宮廷・堂上に書画多数を献じた。明治五年（一八七二）六年と、皇后（昭憲）皇太后（英照）の御前で揮毫する光栄にも浴している。

教育者花蹊は、安政六年（一八五九）父君重敬の姉小路家出仕に伴なって、大坂中之島に家塾を主宰したことはじまる。事実上、学園の濫觴といえる。時あたかも幕末の争乱期で、慶応元年（一八六五）京・姉小路家邸内に塾を移した。翌年暮に新居が落成、「不言亭」と名づけた。維新の東京遷都で、女史も明治三年（一八七〇）に東上する。築地の沢邸・神田の姉小路邸と塾舎が遷る間、五年八月太政官の「学制」布達によって組織ある学校教育の意を固める。八年一月

八日、女史は神田仲猿楽町に跡見学校を開くのである。これが学園の発祥である。講堂正面の扁額「成蹊館」は、三条実美の書と伝える。花蹊・不言亭・成蹊館の一連は、いうまでもなく『史記』の「桃李不言下自成蹊」に基づく。女史がみずからに課した教育の理想と、ひそかな矜持とが察せられる。

女史は開校当日の日記に、「即日入門せる華族の姫達八十余名」と書いている。のちに後嗣となる万里小路李子も、その一人であった。父君の主家姉小路家との所縁、また女子教育の黎明期とあって、入学者は暫く堂上の關係を主に、限られた階層の子女が占めた。先行の女子校に、京都府新英学校女紅場（のち府立一女）の例がある。女紅場また女功場は、女子の仕事場の意である。勸業政策を背景に、養蚕・織物・手芸・裁縫など、技術の習得を一義とした。京都という土地柄ばかりでなく、この時期各地に開設されたという。女史はこれを採らず、学芸による高雅な情操の涵養を教育の基本に置いた。安政以来の教育上・芸術上の経験と抱負によったのである。

それは開設の授業科目に、端的にあらわれている。自身が堪能の書画を中心に、国漢・和歌・琴曲・插花・点茶・裁縫などの九科目である。独自の教育体系への志向であり、そのために講筵には知名の専門家を多数囑した。蒲生重章・鈴木重嶺・渡辺重石丸をはじめ、大口鯛二・大和田建樹・落合直文・加藤義清、服部躬治・与謝野寛、多久毎・志賀重昂・伊達愛・東儀鉄笛・新渡戸稻造・箕作元八の諸家に及ぶ。一女学校には稀有最高の顔触れである。これらの碩学好士との邂逅に、女史は受業生の至福を希ったのである。

時勢は明治二六年「女子教育に関する訓令」、二八年「高等女学校規程」、三二年「高等女学校令」、四三年同令改正と進展する。低きに置かれた女子教育界の大勢も次第に整ったが、その推進とともに国家の教育支配も強化の傾向をたどった。その中であって、女史は当初からの教育志向の堅持に努めた。それを大隈重信は女史八十歳の賀に、「内に凜然として動かざるものがある」と賞揚した。人間形成の基本を問うて、女史はひたすらな信念と情熱とを傾けて、生涯を教育実践に貫いたといえよう。

この先覚の教育伝統のもとに、学園は昭和二一年（一九四六）に、文科（国文）家政科の二科による高等女学校専攻科を設置した。本学設立への第一歩である。第二次大戦直後、戦禍による荒廃のさなか、女子高等教育を期待する社会の機

運を早々と察知したからである。翌年の新学制施行を経て、廿五年短期大学制度の発足とともに専攻科を改め、本学が設立された。文科・家政科の二科ながら、後者に斬新な生活芸術課程が設けられた。それが翌々年に独立、文科・家政科・生活芸術科の三科構成となる。五七年文科に従来の国文専攻に加えて、英文専攻が設けられた。

専攻科にはじまる学園の高等教育の歴史も、ようやく半世紀に近づきつつある。しかし、一八歳人口漸減の事態を近々にひかえて、真価が問われるのはこれからである。遅疑停滞は許されぬ状況となりつつある。先へ進むには草創以来の歴史をふりかえり、展開の脈絡を適確に捉えることによって、当面の課題への対処に途が開かれるであろう。この記念すべき年を好機として、向後に遺漏なきを期したい。平成二年度本学紀要の発刊にあたり、一言所懐を申し述べた。終りに本書収載の諸論考に、学界諸賢のご教示のほどをお願い申しあげる。

(平成二・一〇・一五)